

活用されています JAバンク新規就農応援事業

Case 1 岩手県一関市・(有)かさい農産

研修生受け入れ 地域に貢献



事業による研修を受けた藤森さん夫妻(中央、右)

岩手県一関市の中心部から東へ車で約20分。のどかな田園地帯が広がる中に、ハウスと露地を合わせ約300㎡で小松菜や水菜、ホウレンソウなどの葉物野菜を生産する(有)かさい農産があります。

同社は新規就農者支援に力を入れています。多くの研修生を受け入れ、希望者には就農先の候補地選定から就農までを支援。JAバンク新規就農応援事業を活用し、これまでに研修生7人が巣立ちました。

同社は、JA岩手県信連の紹介をきっかけに事業を活用。JAいわて平泉のサポートを受けてきました。事業が縁で、JAバンクの融資を受けるようにもなりました。

研修生は栽培技術や先進地の農家視察、農業生産工程管理(GAP)の講習や販売実習など、食の安全・安心に関わる知識を学びます。

幼い頃から祖父母の家庭菜園に親しんできたという、市内に住む藤森ゆかさん(22)は、この事業で研修を受けました。高校の農業科を卒業した後、同社に就職。一足早く研修を終え、就農していた夫の学さん(34)と結婚しました。ゆかさんは「家族で作った野菜を一人でも多くの人に食べてほしい」と思いを語ります。

学さんは埼玉県で会社務めを経験した後、故郷での就農を決意。同社で研修を重ねました。「ここで規模を拡大しながら、家族みんなで輝きたい」と夢を語ります。

代表取締役会長の葛西信昭さん(57)は「研修生の受け入れで地域貢献をしたい。事業はそれをサポートしてくれるので非常に助かっている」と話します。

Case 2 JAふくおか八女管内

就農の夢を 産地が後押し



栽培について真剣に話す入部さん(左)と石橋さん

福岡県のJAふくおか八女管内は、イチゴ「あまおう」やナス、アスパラガスなど、施設園芸で新規就農を目指す人がたくさんいます。JAは、受け入れに掛かる費用を少しでも軽減できるように

と、研修受入農家にJAバンク新規就農応援事業の活用を勧めています。

入部晋哉さん(37)は平成25年1月から26年8月まで、八女市立野にある石橋渡さん(61)のハウスでイチゴ栽培を学びました。

入部さんは八女市の出身。サラリーマン家庭に育ち、県外の大学を卒業後、生活雑貨の小売店などで働きました。もともと自然が好きでしたが、本や講演会で興味を持ち、就農を決意。「地域のつながりを生かした方がいい」と考え、地元で就農する道を選びました。県の八女普及指導センターやJA、市役所に相談し、研修先を決めました。

研修では、イチゴの苗の定植や管理、収穫やパック詰めなど、すべての作業を体験しながら学びました。研修後は、実家の農地にハウスを建てて就農しました。独立しても、すぐに聞きに来られる位置に石橋さんのハウスはあります。入部さんは「食料を海外に頼るのには違和感がある。担い手のいない田畑を耕し、子や孫の代まで農業を残したい」と夢は広がります。

イチゴ栽培歴40年の石橋さんは「若く、やる気のある人が研修したいなら、知っている限りを伝えたい」と話します。JAのイチゴ部会長を務めたこともあり、「産地を維持するには若い力が必要」という思いがあります。

研修受入先への研修費用の助成もあります

対象者

研修受入先(農家、農業法人、生産者組織等)

- (助成要件)
- ・恒常的、かつ、1年以上にわたって実施される実践的な研修であること
 - ・研修生が、①18歳以上65歳未満であり、かつ、②独立就農もしくは親元就農後5年以内に経営承継が見込まれる方であること

事前申請期間(事業エントリー)

平成29年9月1日～平成30年2月28日

助成申請期間(本申請)

平成30年5月1日～平成30年6月30日

助成金額

【指導・育成体制が充実している先】

研修生1人あたり月額最大3万円(研修生1人あたり24か月分まで)

【その他】

研修生1人あたり月額最大1万円(研修生1人あたり24か月分まで)